

クローズアップ NGO・NPO

特定非営利活動法人

泉京・垂井 理事 神田 浩史

おんぼろ
“**穩豊社会**” に向けて半歩ずつ

～フェアトレード&地産地消を軸にした住民主体のまちづくり～

岐阜県の西南部に位置する垂井町は人口2万8,000人余の穏やかな農村地帯です。奈良時代に美濃の国府が置かれ、東山道が通り、江戸時代以降は中山道と東海道の脇往還・美濃路の追分宿として、多くの人馬、荷駄の往来が見られた交通の要衝です。現在も、東海道本線、東海道新幹線、名神高速道路などが町を貫いています。一方、垂井という地名の語源となった多くの泉やガマがあり、水環境に優れた町でもあります。交通の利便性の高さや豊富な水資源ゆえに、高度経済成長期に多くの工場が誘致され、当時と比較すると業態の変化は見られるものの、製造業が町の経済に占める比率は高くなっています。

垂井町で初めてのNPO法人として2005年11月（法人認証は翌年3月）に設立されたのがNPO法人泉京・垂井です。垂井町内に見られる数々の泉のように住民活動が滾々と湧き出でて、京のように盛んになることをイメージして命名され、“幸福度の高いまち垂井”を目指すことを目的に掲げています。当初はまちづくり、環境、安心安全の三分野で活動を始めましたが、途中、安心安全の地域づくり（青色回転灯搭載車による町内パトロール）は別法人へと独立し、代わって生涯学習・多文化共生が活動の柱として加わり、今日まで活動を展開してきました。また、活動を始めた当初は比較的年齢層の高い無償ボランティア主体の活動でしたが、2009年に初めて有給職員を置いて以降、今日まで3～5人の年齢層の若い有給職員が主体となった活動へと変遷してきています。

■ 多岐にわたる活動展開、 ■ 多様な協働形態

泉京・垂井の活動で最初に力点を置いたのは、垂井町の多彩な水環境を調査することと、その調査結果を基にした水環境ウォーキングの実施でした。井戸、



垂井を象徴する横穴式取水施設“マンボ”。マンボの多くは農業用水目的だが、このマンボは家庭用に使用されている。

ため池、井堰、泉、ガマなどに加えて、国内ではこの地域に集中する横穴式の利水施設マンボ。こういった水環境を特徴づける地点を丹念に調査し、それらを結んだ水環境ウォーキングを毎年、続けています。泉京・垂井が発足した一年後に岐阜県内の揖斐川流域のNPOのネットワークとして西濃環境NPOネットワークが立ち上がり、その基幹事業として2014年8月まで実施された“ぎふ・エコライフ推進プロジェクト”にも精力的に取り組んできました。岐阜県南部800店舗以上の協力を得たこの事業は、マイバッグ持参、マイ箸持参、環境行動への参加、フェアトレード商品の購入などの日常的な行動にそれぞれポイントを付与し、100ポイント貯まればエコ・グッズと交換するというもので、行政域を超えたユニークな活動が評価され環境大臣表彰などを受け、地域に環境意識がある程度根づく一助となりました。

こういった活動を通じて得た揖斐川流域のNPO間の信頼関係を基に展開した事業が、一つは厚生労働省系の基金と協働した“地域づくり人材育成

事業”です。半年間、職業訓練の一つとして実施し、座学だけでなくさまざまなNPOでの実習を加え、2年間で15人が修了され、うち9人がNPOに就職されました。もう一つは、岐阜県との協働で実施してきた“都市農村交流事業”です。これも座学と流域各地のNPOなどとの協働で現地見学を実施し、座学ではグローバルな課題と地域課題との繋がりを考えてもらいながら、揖斐川流域の農山漁村を訪問し、厳しい状況を知るとともに、そういった状況下で前向きな取り組みを展開される人々との交流を進めていきました。もう一つが、東日本大震災で被災され岐阜県内に避難されている方々を対象とした“ぎふ・西濃・新しい縁づくり事業”です。内閣府の新しい公共支援事業の一つとして採択され、岐阜県や揖斐川流域の市町との協働で事業を進めていきました。

垂井町内に留まる活動としては、垂井町との協働で進めてきた“ゴミ減量推進事業”があります。垂井町からの委託を受けて周辺市町のゴミ減量の実態調査を実施し、垂井町内のゴミ減量施策について政策提言。その結果、垂井町内にゴミ資源化拠点であるエコドームが開設され、改めてその事業の啓発活動を担っています。製造業が多い垂井町では人口の約3%が外国籍住民です。こういった状況にありながら、多文化共生に係る事業がほとんど見受けられなかったために、岐阜県国際交流センターと協働で日本語学習の機会を設けたり、生活相談や法律相談を実施するなどの事業を展開していきました。そうした事業の積み重ねを通じて、垂井町役場における通訳者の必要性を把握し、岐阜県国際交流センターの支援を受けて泉京・垂井が通訳者を役場に派遣し、その後、垂井町が通訳者を置くようになりました。

■ フェアトレード&地産地消、そして稔豊社会を目指して

泉京・垂井がこの間力を入れてきたもう一つの事業がフェアトレード&地産地消の推進です。2011年5月に第1回フェアトレードデイ垂井を開催したのを皮切りに、毎年、フェアトレードデイを開催し、4回目を重ねた2014年のフェア

トレードデイ垂井には約5,000人もの来場者があり、垂井町の春の風物詩として定着しつつあります。また、毎月一度、中山道垂井宿の一角でかつて六の付く日に開かれていたという“六斎市”を開催し、フェアトレード商品や地産地消品を地域に紹介し続けています。こういった活動をさらに垂井町で広めるために、垂井町商工会など各種団体と協働で町ぐるみでフェアトレード&地産地消を推進する母体として、2014年8月にはフェアトレードタウン垂井推進委員会を設立しました。さらには、フェアトレード&地産地消の専門店“みずのわ”を10月に泉京・垂井の直営で開店し、フェアトレード商品と並んで垂井町をはじめ揖斐川流域の数々の地産地消品を扱っています。



2014年4月27日に開催された第4回フェアトレードデイ垂井の全景。会場は垂井町立朝倉運動公園。



古民家を活用したフェアトレード&地産地消のお店“みずのわ”。NPO法人泉京・垂井が経営し、垂井町がフェアトレードタウンを目指す推進拠点となっている。



フェアトレード&地産地消のお店“みずのわ”店内。フェアトレード商品、揖斐川流域の地産地消品が並び、奥にはフリースペース“ぶかぶか”が用意されている。

フェアトレードによりグローバルな課題についてメッセージを発するとともに、その連関において生じている日本の農山漁村の疲弊についても注視していき、外部との収奪する、されるといった関係性を見直し、アジア・モンスーン地帯に共通に見られる流域単位の循環型社会を再構築していくことを“稔豊社会”の実現と名付け、揖斐川流域での多彩な活動をつなぎ、紡いでいく。これまでの蓄積を基盤に、今後の泉京・垂井の活動を展望すると、こういった活動が中心になっていきます。そのためには、まず一里塚としてフェアトレードタウン垂井の実現に向けて半歩ずつ進めていきます。町外からの反響は大きく、NPO、大学、生協などからの見学や研修受け入れが相次いでいます。小さな町からの大きな挑戦。ぜひ、注目いただきたく、ご助力、ご助言をいただきたいと思ひます。